



羅針盤

2015年度 第5号
都立豊多摩高等学校
進路図書部

2015（平成27）年6月12日発行

合唱コンが終わった。燃え尽きずに、そこで培ったチームワークを次のステージにつなげよう。

与えるものにこそ、与えられる

現代思想の内田樹は、「納得のゆく言葉」より「片づかない言葉」のほうが私たちの記憶に残るといい、そんな、すぐに呑み込めない「片づかない言葉」の例を三つ挙げている。

「世界と君との闘いにおいては、世界を支援せよ」

「私が語っているとき、私の中で語っているのは他者である」

「私たちは欲するものを他人に与えることによってしか手に入れることができない」

内田樹『私家版・ユダヤ文化論』（文春新書、2006）161頁

いずれも挑発的、逆説的…、確かに印象に残る。とりわけ三つめの「私たちは欲するものを…」が記憶に残った。人間関係の仕組みの重要なポイントに触れているような気がしたのである。

ベテランの先生に、進路指導に関連して言われたことを思い出す。

「難関大学の合格はね、波の白いしぶきのようなものなんだ。そこだけを増やすことはできない。波そのものを大きくするしかないんだよ」

呑み込みにくい、忘れられない言葉である。比喩だけの意見だから、文脈に左右される。社会は難関大学の合格者数に注目するから、内部の人間までそれに振り回されがちだけれど、結局、学級や学年を集団として育てるのが、確実な正しい方法なのだ。そういうことだったと思う。受験勉強は孤独な営みだけれど、グループとしての質が問われる。今でこそ、予備校までが「受験は団体競技」と言っているが、そのころは耳新しかった。

個人の心理が周囲に拡がったり、周囲の空気に個人が影響されたりする。

君たちも、どこかで経験があるんじゃないか。勉強の出来る子が、授業中、わざとつまらなそうにする。成績不振の子が、「そんなに勉強して何が面白いの？」と牽制する。努力しているのに、していない振りをする。そんなネガティブな空気が広まると、人間関係が悪循環にはまり、仲間はずれを警戒しながら处世することになる。神経をすり減らすから、勉強に打ち込みにくい。実力も発揮できなくなる。

大きな波は、それと対照的な状況だ。勉強でもスポーツでも、頑張っている人がリスペクトされ、そのことが、お互いの次のモチベーションになる。成績不振に陥ったときには、不得意な分野を、得意な学友に教えてもらう。それぞれの関係で切磋琢磨する。お互いに自己開示できれば、どんな努力がどんな成果に結びつくかわかるから、学友がペースメーカーになる。3年生なら、引退が遅い部活の試合を応援に行き、逆に勇気をもらう。そんなポジティブな連鎖が広まれば、自分を偽ったり、周囲を警戒する必要がないから、実力も発揮しやすくなる。いい循環が生まれる。クラスや学年が、そんなふうにならなくても大きな塊になれたとき、君たちは様々な成果を手にするようになるだろう。

そんな大きな波を起こすにはどうすればいいのか。

一番の敵は、孤独である。

水泳の日本代表が想起される。近年こそ、オリンピックの強豪国と目されるようになった。が、アトランタ五輪（1996年）まではそうではなかった。大会前の日本選手権ではメダル圏内のタイムをたたき出した有望選手たちが、五輪ではことごとく失速、惨敗したのである。

ヘッドコーチに就任した上野（弘治）委員長は、惨敗した原因は日本代表チームが所属のクラブごとに分断されていて、選手たちが重圧を個人で受け止める以外なくなっていたことにあると考えた。クラブの枠を超えて、日本代表をひとつにしなければいけない。選手同士がお互いを心から応援する、有益な情報を教え合う、そのような日本代表にしなければと、クラブ間の壁を取り除く努力をした。

もちろん上野委員長1人ですべてを達成できたわけではないが、最近では水泳ほど選手たちが日本代表で練習することを望んでいる競技は、ちょっとほかにはないと言っていい。「日本代表が大好き」と公言する選手もいる。ロンドン五輪で11個のメダルを取っているだけでなく、リレーだけに出場する脇役的な選手たちの熱情を見ると、このチームづくりは、ほかの競技も学ぶべきところがあるように思える。

「小川勝の直言タックル——水泳連盟の人事」（「東京新聞」2015年6月1日（月）25面）

ほかの競技どころか、私たちが学びたいところであろう。学友同士がお互いを心から応援する、有益な情報を教え合う、そういう集団になれたなら、君たちは個人の実力を遺憾なく発揮することができるだろう。そして、そういう集団を形成し、貫く仕組みこそが、「私たちは欲するものを他人に与えることによってしか手に入れることができない」なのではないだろうか。仲間をリスペクトすることが、自分がリスペクトされる方法であり、その仲間を孤立させないことが、自身が孤独に陥らない方法なのである。山崎正和も、巨視的には世界の文明は統合に向かっているとする著作の中で、孤独を回避する社交が、文明を前進させる契機になったことを指摘している（山崎正和『世界文明史の試み——神話と舞踊——』（中央公論新社、2011）。「この気持ちは誰にもわからない」と嘆いているだけでは、何も始まらないのである。

サッカー選手のクリスチアーノ・ロナウドが2014年度のバロンドール（ヨーロッパの年間最優秀選手賞）を受賞し、インタビューを受けた。最後に、質問者から「最近のあなたは、プレーの面での進化が感じられます。リーガ（エスパニョーラ）得点王であるばかりかアシスト王でもあり（インタビュー時）、他の選手にも最も多くの得点機を供給しているわけです」と発言を促されると、次のように述べた。

「（微笑みながら）その数字こそ、僕が年ごとに進化していることを示している。意識的に進歩を目指していた領域だからだ。将来、僕の最高のパフォーマンスが得点ではなくアシストになるかも知れないと誰が予測できるだろう。パスナーはチームの重要性を再認識させてくれる。誰もひとりでは勝てない。利他主義こそが不可欠なのに、たぶんこれまでの僕は、自分のこと、自分の記録のことばかりを考えていた。今は違う。チームのために働ける選手になった」

——ゴールと同じくらいアシストにも喜びを感じられるようになったのですね。

「その通りで、与えるものにこそ、与えられるのだということを、僕もようやくわかるようになったんだ」

「Number」871（2015年2月19日）号、89頁

オープンキャンパスにいこう！！！！

志望大学を考えるときは、今の学力より上を目指すのがポイントです。「私が〇〇大学なんて」と思わないことです。今入れるところを探すのではなく、**入りたい大学や学部**を探して、そこに入れる力を磨くのです。大切なのは君が向上すること。受験は、そのきっかけです。だったら、高望みのほうがいいのです。先生方は、逆転や奇跡を沢山目撃しています。どんな希望も笑いません。

志望校を決めるきっかけに「オープンキャンパス」を利用して下さい。大学入試説明会に、授業体験や校内見学会等を含めたものです。キャンパスを歩き、風に吹かれ、先生や先輩に接して得た「この大学に入りたい」という実感が、明日へのモチベーションになります。

夏休みにかけて、オープンキャンパスのシーズンです。大学によっては始まっています。進路指導室にポスターを掲示します。自分でも、インターネットで調べて下さい。参加申し込みが必要なところや、開催回数少ないところもあります。